

## 方言多用地域における表現の多様性 —介護施設利用者が食事場面で使用する方言について—

和田礼子<sup>1</sup>・吉里さち子<sup>2</sup>

キーワード：方言、看護・介護に従事する外国人、カ語尾、格助詞、音変化

### 概要

本研究は熊本市を中心とする地域で使用されている方言を、看護・介護に従事する外国人が「聞いて理解する」ための、方言学習用アプリ教材開発を目指している。教材作成に先立ち、介護施設で働く日本人職員40名を対象に「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査を実施した。本稿は調査で収集した熊本方言について分析し報告するものである。

調査ではまず看護・介護に携わる外国人のための日本語学習教材『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語』の中から、「食事」「痛み・症状を訴える」「日常生活」の場面で、施設利用者の発話として例示されている文を抽出した。この文を日本人職員に「食事が済む→もう、クイオワッタバイ」のように、「施設利用者からよく聞く熊本方言」に変換して記述してもらった。本稿で分析対象とするのは食事の場面で使われる共通語文（11文）に対して回答のあった熊本方言の文（512文）についてである。

収集した文を「状況を説明する表現：名詞＋が＋状態変化動詞／形容詞」、「相手の行動を促す表現」「自分の行動について述べる表現」に分けて統計的手法を用いながら分析を行った結果、次のような特徴が明らかになった。

形容詞については全て方言形「ナカ（ない）、カタカ（固い）、コユカ（濃い）、オオカ（多い）」のようにカ語尾（熊本方言で形容詞の終止形・連体形活用語尾が「カ」になること）が見られる。助詞については、主格を表す助詞「が」は「ノ、ン」へ、「を」は「バ」への交替が大勢を占めている。

助詞・形容詞に共通語との規則的な対応が見られる一方、文全体を見ると共通語文に対応する地域方言の文は多様である。例えば名詞「みそ汁」に対応する表現として「ミソシユル、ミソオツユ」など九つのバリエーションが見られるほか、「(みそ汁が) さめる」には動詞「ヒユル（冷える）、サムル（冷める）」のほか形容詞「冷たい」が当てられている。述部はさらに「ヒエトル（冷えている）、ヒエテシモトル（冷えてしまっている）」「サメトラス（冷めている）、ウッサメチシモトル（冷めてしまっている）」など、多様な形式が出現する。

共通語においても、現実の言語コミュニケーションの場面で、同一事象を表す語や文法形式の組み合わせが多岐にわたることは想定されるが、社会活動の中で方言が頻繁に使用される地域においては、さらに方言特有の音変化や文法形式のバリエーションが重なり、共通語以上に多様な表現形式が出現することが今回の調査で確認された。

社会活動の中で方言が頻繁に使用される方言多用地域で看護・介護に従事する外国人のための方言学習教材では、助詞や形容詞に見られる共通語と地域方言の規則的な変換とともに、出現頻度の高い多様な方言形式を提示する必要がある。今回の調査で観察された熊本方言の音声や文法表現の特徴、出現頻度を詳細に分析し、今後教材化を進めていきたい。

<sup>1</sup> 鹿児島大学総合教育機構グローバルセンター

<sup>2</sup> 熊本大学 大学教育統括管理運営機構附属 多言語文化総合教育センター

## はじめに

2008年以降、EPA（Economic Partnership Agreement、経済連携協定）に基づくインドネシア人・フィリピン人・ベトナム人看護師・介護福祉士候補者の受入れが行われており、2019年1月1日時点では677箇所の施設等で3,165人が雇用されている（厚生労働省資料）。これに加え在留資格「介護」の創設、技能実習の対象職種に「介護」が追加されるなど、今後、看護・介護の分野で働く外国人のさらなる増加が見込まれる。このような看護・介護に携わる外国人のための日本語学習教材としては『はじめて学ぶ介護の日本語』（スリーエーネットワーク2017）、『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語』（凡人社2010）のほか、『介護の専門日本語—介護福祉士国家試験合格をめざす人のために』（凡人社2021）などがあり、種類も増えている。

一方、上野（2012）は、外国人介護人材が介護現場で遭遇する日本語の困難点として、「専門用語、待遇表現」とともに「方言」を挙げている。今村（2014）も「看護88%、介護75%の研修生が、方言がわからなくて困った経験を有している」と報告しており、看護・介護に携わる外国人にとって方言は、優先度の高い学習項目であると言える。

本研究グループは熊本市を中心とする地域で使用されている方言を、看護・介護に従事する外国人が「聞いて理解する」ための方言学習用アプリ教材の開発を目指している。教材作成に先立ち、介護施設で働く日本人職員40名<sup>3</sup>を対象に「利用者がよく使う熊本方言」に関する質問紙調査を実施した。本稿は調査で収集した熊本方言について分析し報告するものである。

調査に使用したのは海外産業人材育成協会が作成した日本語学習教科書『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語』の中から、「食事」「痛み・症状を訴える」「日常生活」の場面で、施設利用者の発話として例示されている文（共通語）である。これを、介護施設で働く日本人職員に「食事が済む→もう、クイオワッタバイ」のように、「施設利用者からよく聞く熊本方言」に変換して記述してもらった。調査では、できるだけ自然な文の形になるように、また、一つの共通語文について思いつく熊本方言をできるだけたくさん書いてもらえよう依頼した。

今回分析対象とするのは食事の場面で使われる共通語文（11文）に対して回答のあった熊本方言の文（512文）についてである。収集した文を「状況を説明する表現：名詞+が+状態変化動詞／形容詞」、「相手の行動を促す表現」「自分の行動について述べる表現」に分け、分析を行う。

本稿では、得られた回答を対応する共通語文ごとにまとめ、名詞+助詞のまとまりの他、文の述部については提示された文に相当する箇所を抽出し、動詞、助動詞、終助詞などに分けて分析を行った。併せて、量的な差について検定を実施し、数値的な検証をおこなった。検定は、2項目間であれば正確二項検定、3項目以上であればカイ二乗検定を用いた。

## I. 状況を説明する表現：名詞+が+状態変化動詞／形容詞

本章では、施設利用者が（眼前の）状況を述べる場面で、どのような表現が使われているのかについて詳説する。調査では日本人介護従事者に、以下の①～⑥の状況を施設利用者はどのように表現するのか尋ねた。

- ①スプーンがない。
- ②食材が固い。
- ③味が濃い。
- ④味噌汁が冷める。
- ⑤食事の量が多い。
- ⑥エプロンが汚れている／汚れてしまった。

<sup>3</sup> 調査協力者は熊本市の介護老人保健施設で働く介護福祉士、理学療法士、作業療法士、看護師、介護支援職員。

状況を説明する事象文①～⑥には、それぞれ表1のような回答が得られた。

表1は「利用者がよく使う熊本方言」への書き換え文に現れた名詞、助詞、述部のバリエーションをまとめたものである。熊本方言に書き換えられた文の述部には、最初に提示した共通語文とは異なる動詞や表現が見られたため、右列に「共通語訳」を加えた。例えば、①「スプーンがない」に対応する熊本方言には「さじノナカ(スプーンがない)」だけでなく「さじバハイヨ(スプーンをください)」といった表現が見られた。述部の要素に応じて出現する格助詞が替わるため、①の述部は2種類に分けている。

表1 状況を説明する表現①～⑥の回答

①スプーンがない	
「利用者がよく使う熊本方言」として書かれた文	共通語訳
スプーン、さじ	スプーン
が、ノ、ン ↳ナカ、ナカケド、ナカタイ、ナカバイタ、ナカヨ、ナカゴタル ニヤア、ニヤアバイ	が ↳ない
バ ↳ちょうだい、ハイヨ、くれンネ	を ↳ください
②食材が固い	
食材、コル、コラ、φ	食材/これ
が、は ↳かたカ、かたカね、かたカナ、かたカバイ、かたカケン、かトウシテ、 かトシテ、かたくて、かチャー、かチャーね、かチャーバイ コワイ、コワカ	が ↳固い
③味が濃い	
あじ、あじつけ /コラ、φ	味/これ
ノ、が、ン ↳コユカ、コユカねえ、コユカナ、コイカ、ゴイカ、コイコ、コシテ /辛カ、辛カナ、カリヤ、塩辛カバイ、塩カリヤ、しょっぱい	が ↳濃い /塩辛い
④みそ汁が冷める	
みそシュツ、みそシュル、みそシュリ、みそシン、みそオツユ、 しる、シュル /コツ、コラ	みそ汁 /汁/これ
が、ノ、ン、 ↳さめトル、さめとらず、さめトルばい、さめとつタイ、さめっしまう、さめっ しもタイ、さむるタイ、さむつタイ、さめる、さめたバイ、ウツさめチシモ トル /ヒユツタイ、ひえトル、ひえてシモトル、ひユツツ /つめたカ：つめたカバイタ、つめたカバイ、つめたカロ、つめチャー、 つめトーなる、つめトーなった、つめトーなったバイ	が ↳さめる   /ひえる /つめたい
⑤食事の量が多い	
めし、食事、食事の量、めしン量、量、コラ、φ	食事/ごはんの量
が、ノ、ン、 ↳おおカ、おおカナア、おおカバイ、おおカモン、おおカゴタ、おおシテ、 おおすぎて、 おおすぎる、おおすぎバイ /うんとある、うんとこさある、グツサリある、タイギヤあんね、イッピヤア、 やまんゴツある	が ↳おいしい   /たくさんある
⑥エプロンが汚れている	
エプロン、前かけ、前	エプロン
ノ、が ↳汚れッシモタ、汚れチシモタ、汚れた、汚れたバイ、汚れたタイ 汚れたケン、汚れトル、汚れトルバイ、汚れトルケン、 /汚してシモタ /きたなカキタノ、きたノウなった、きたノウなったバイ	が ↳汚れてしまった   /汚してしまった /きたなくなった

まず、方言的な特徴を表したものとして、形容詞のカ語尾、助動詞のバリエーション、格助詞「が」の交替、終助詞の出現、音韻の変化が挙げられる。

最初に、形容詞については、設問では①「スプーンがない」、②「食材が固い」、③「味が濃い」、⑤「食事の量が多い」が使われているが、いずれも共通語の「-い」を使用した回答はなく、全て方言形ナカ、固カ、コユカ、多カのようにカ語尾への完全な交替が生じている（例：②食材が固い→コラ固カ（これは固い））。

助動詞は、④では変化構文を作る「なる」、完了「しまう」とその方言形シモタの他、結果を表すトル、及び他者の動作や変化を表す動詞に下接するラスをつけたトラス、⑥でも変化構文を作る「なる」や完了「しまう」の方言形シモタ、結果のトルが用いられている。（例：⑥エプロンが汚れている→前かけノ汚れトル）

また、助詞については、①～⑥で提示されている文で使用されている格助詞「が」について注目した。回答では、いずれの文においても、格助詞「が」から方言形「ノ」「ン」への交替が多数見られる。このうち、①「スプーンがない」、③「味が濃い」、⑥「エプロンが汚れている／汚してしまった」では、共通語の助詞「が」と方言形の助詞ノの出現に有意差があるという結果が出ている。（ $\chi^2=14.836$ ,  $df=5$ ,  $p<.05$ ）

回答で使用されている終助詞として、例えば①「スプーンがない」では、共通語「よ」の使用（全49件中2件）が見られるが、方言形バイ・バイタ（同7件）、タイ（同3件）をはじめ、ネ（同1件）等も使用されている（ $\chi^2=6.385$ ,  $df=3$ ,  $.05<p<.10$ ）。方言形タイ、バイとも熊本方言を代表する終助詞であり、共通語形式と方言形式の使用については有意な差があるという結果となっている。

最後に、全項目に共通して現れた現象として、音の変化が挙げられる。先述した名詞が指示詞「これ」に置き換わる文では、共通語の「これ」ではなく主にラ行語末音が短縮弱音化したコルや声門閉鎖音を伴うコッが用いられている。他にも、「みそ汁」では、語末に声門閉鎖音が現れるシュッや、声門閉鎖音に替わって [i] を用いるシュリという回答も見られた。『九州方言の基礎的研究 改訂版』（1991）では熊本方言について「弱母音化法則によって、狭い後母音は、曖昧微弱な中舌母音的なものになるか脱落するのが強固な法則である」とあり、「誰」は [daɾ] の他 [daɾʰ][daɾʷ][dai][dat][daʔ] と発音されるとの指摘がある（p.228）。今回「これ」についても、コッ [kot] [koʔ] やコル [kor] 等のバリエーションが観察された。また同書では語末音についても、「その母音の無声化ないし短縮弱音化を一般とするが、さらに進んで、その音節が声門破裂音 [ʔ] になることもある」と記述されている。共通語「みそ汁」とこれら方言形の出現には有意差が認められることから、これが熊本方言を特徴づけていることがわかる。（直接確率計算,  $p=0.0019$ （両側検定）, \*\* ( $p<.01$ ））。

他の音韻的特徴としては、④の「冷める」の代わりに用いられている「冷たい」について、連母音 [ai] を避けた方言音ツメチャーという [ja:] を用いたイ語尾<sup>4</sup>を使用した回答も見られた。このイ語尾の例は他に、②の「食材が固い」の「固い」：カチャー、③の「味が濃い」で使用された「辛い」：カリヤーがあった。『九州方言の基礎的研究 改訂版』によると、イ語尾は、九州東部一帯から九州南部の大隅及び日向南部地方にかけて優勢であるとされている。また、基本的に「カ語尾」が優勢な熊本地方でも、東北部では三音節以下の語に「イ語尾」の併用が認められる場合が多いという。神部（1992）では、「イ語尾」は老年・少年層に優勢で、（あまりの激痛に）イチャー（痛い）や（予想外の熱さに）アチャー（熱い）等「強い感情が表出」されているとの記

<sup>4</sup> 九州方言で形容詞の語末が「からい→カラカ」「痛い→イタカ」「ひどい→ヒドカ」のようにカに交替するが、この形はカ語尾と呼ばれ、「からい→カリヤー」「あつい→アチャー」「ひどい→ヒデー」のような形となるものはイ語尾と呼ばれている。

述もある。また、『九州方言の基礎的研究 改訂版』では「カ語尾形語は基本形であり、社会性の強い上品な公的言語と言える。イ語尾形語は家庭語・生活語・卑言的性格を持つ」(p461)との記述もあることから、生活の場である介護施設でよく使われると推測される。

次に、方言としての特徴には該当しないが、高齢者の語選択に関する特徴として、名詞の語種選択や、指示詞の使用、名詞の省略について述べる。名詞の漢語、和語、外来語の選択について、①の「スプーン」対「さじ」(直接確率計算、 $p=0.0000$  (両側検定)、\*\* ( $p<.01$ ))、⑥の「エプロン」対「前かけ」(「前」のみも含む、直接確率計算、 $p=0.0290$  (両側検定)、\* ( $p<.05$ ))となり、外来語対和語では有意に差がみられた。しかしながら、⑤の「食事の量が多い」の「食事」対「ご飯」「めし」のように、漢語対和語では、有意差はなかった(直接確率計算、 $p=0.1435$  (両側検定)、ns ( $10<p$ ))。外来語は高齢者である施設利用者にはあまりなじみがないため、和語の積極的な利用が見られるということがいえる。

一方で、①の「スプーン」は旧日本語能力試験の出題基準では旧4級レベルの語とされており、同旧2級の「さじ」より平易な語だとされている。同様に、「エプロン」も同旧2級であったが、「まえかけ」はレベル設定がされていない。外来語である「スプーン」「エプロン」は、「さじ」「まえかけ」という和語より、日本語学習者にとって習得しやすい語であるが、「さじ」や「まえかけ」といった和語も専門的な語彙として、現場で必要だということが言える。

また、名詞の代わりに指示詞を利用する傾向について、眼前の事象について述べているため、「スプーン」「みそ汁」のように直接名詞を使うのではなく、指示詞の「これ」の方言形コル、コッを使った回答も散見された(例：④「みそ汁が冷める」→コッはつめたカコ。(これは冷たいでしょう))。これについては、有意に差がある結果とはならなかった( $\chi^2=0.442$ ,  $df=2$ , ns)。指示詞「これ」の方言形コル、コッは先述のとおり、ラ行音弱音化の現象の一つであると考えられる。

名詞の省略については、①以外の②～⑥のいずれの回答にも出現していたが、③「味が濃い」を除く②～⑥は、名詞の省略に有意差があるという結果となった( $\chi^2=85.433$ ,  $df=4$ ,  $p<.01$ )。特に特徴的なのは、②「食材が固い」、⑤「食事の量が多い」では、名詞の省略が有意に多く、反対に④「みそ汁が冷める」、⑥「エプロンが汚れている／汚れてしまった」では、有意に少ないという結果になっている点である。省略されることが多いとされた②、⑤と、反対に少ないとされた④、⑥にどのような共通点があるのかについては今回明らかにできなかったため、次稿へ譲ることとしたい。

## II. 相手の行動を促す表現

本章では、施設利用者が相手(主にサービス提供者である介護従事者)に依頼する場合、どのような表現を使っているか分析する。日本人介護従事者に、以下⑦、⑧のような相手の行動を促す文を施設利用者はどのように表現するのか尋ねた。

⑦おてふきをください

⑧食器をさげる

表2は、相手への行動を促す文として提示した⑦、⑧の文から、「利用者がよく使う熊本方言」への書き換え文に現れた名詞、助詞、述部のバリエーションをまとめたものである。熊本方言に書き換えられた文の述部には、最初に提示した共通語文とは異なる動詞や表現が見られたため、右列に共通語訳を加えている。例えば、⑦「おてふきをください」に対応する熊本方言には「おてふきください」の他、「おてふきはナカナ(おてふきはないですか)」といった表現がみられ

た。述部の要素に応じて出現する格助詞が替わるため、⑦は述部を2種類に分けている。

表2 相手の行動を促す表現⑦、⑧の回答

⑦おてふきをください	
「利用者がよく使う熊本方言」として書かれた文	共通語訳
お手ふき、おしぼり、手ふき、手ぬぐい、手をふくと、手拭くと、手ぬぐうと、手ふくと、ふくモン、てパノゴウト	おてふき
バ、 ↳ください、ちょうだい、くれ、くれンネ、くれンカネ、くれンナア、ハイヨ、ほしカ、よカネ、 ノモロてよカナ ノよカナ	を ↳ください  ノもらってもいいですか ノいいですか
は ↳ナカナ	は ↳ありませんか
⑧食器をさげる	
食器、お膳、うつわ、食器、皿、ちゃわんさら、 ノこれ、コッ	食器 ノこれ
ば ↳さげて、さげてハイヨ、さげてヨカ、さげてヨカバイ、さげチ、さげチハイヨ、さげるバイ、さげチィ、さげてください、さげてくれんね、さげナッセ、さグル ノひいてハイヨ、ひいちチハイヨ、ひくよ、ひいてヨカバイタ ノかたして、かたづけんかい、かたづける、ナオセ ノもっていったハイヨ ノひっこめる、 ノして	を ↳さげる  ノひく ノ片づける ノ持っていく ノひっこめる ノする

まず、方言的特徴であるが、助詞「を」と方言形バの交替、依頼表現、動詞のバリエーションの特徴の三つを挙げることができる。状況を説明する表現の①～⑥では格助詞「が」と方言形ノの交替が見られたが、⑦、⑧では格助詞「を」の多くが方言形バに交替している。⑦では文の中で格助詞「を」の役割を果たすものが43件見られるが、そのうちバの使用が37件、⑧では25件中22件がバを使用していた。(いずれも直接確率計算両側検定、⑦  $p=0.0000$  \*\* ( $p<.01$ )、⑧  $p=0.0002$ 、\*\* ( $p<.01$ ))

動詞については、⑦の「おてふきをください」では共通語の「ください」(2件)、「ちょうだい」(9件)より、方言形のハイヨ(19件)、「くれる」の否定形クレン系(8件)、形容詞「ない」のカ語尾のナカナ、拭くように直接指示をする「拭きナッセ」、「ほしい」のカ語尾欲しカ、婉曲的な言い回しのモロテヨカナ(もらってもいいね)やヨカネ(いいね)、「拭く」の方言形でヌグウ(いずれも各同1件)等、方言形を用いた多様な表現が使われている。共通語の「ください」「ちょうだい」と、方言形のハイヨは、どれも相手への要求や依頼を表す表現だが、方言形の使用が有意に多用される結果となっている( $\chi^2=14.601$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ )。

⑧の「食器をさげる」においても、表2に示されているように、動詞「さげる」の表現が多岐にわたり、共通語では「さげる」「(片づけを)する」「ひく」「ひっこめる」「片づける」「持っていく」が用いられ、方言形では、サグル、カナス、カタヅクル、ナオスなどが使われていた。また、共通語「下げる」が用いられているが、活用の際、音変化が加わり、「下げて」が下げチ、「引いて」が引いチと方言形となる例があった。

次に、高齢者の語選択に関わる例として、名詞の語種や表現形式のバリエーションの特徴を挙げる。

名詞については⑦の「おてふき」に相当するものが44例見られるが、その内訳は「おてふき」6件、「おしぼり」3件、「手ふき」21件、「手ぬぐい」1件で、その他、表2にも示されているように、多様な類義語が使用されていた。また、これらの名詞以外に、その名詞自体が思い出せ

ない場合、説明に用いる「～するもの」という意味の方言形「～するト」9件や、「～するモン」1件等、形式名詞を用いた回答もあり、使用の件数に有意な差がみられた ( $\chi^2=18.909$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。一方、⑧の「食器をさげる」の「食器」(44件中9件)では、他に「皿」(同5件)、「お膳」「ちゃわんさら」(いずれも同各1件)に加え、指示詞の「これ」(同3件)や「コッ」(同4件)の使用もあった。こちらの用件数に有意な差は見られなかったが、⑦や⑧に共通して注目すべき点として、使用する名詞が多岐にわたること、名詞自体が思い出せないときに形式名詞を用いて説明する表現に変わる場合があり、それが方言形で使用される点を指摘することができる。

### Ⅲ. 自分の行動について述べる表現

本節では、施設利用者が自分自身の行動について述べる際、どのような表現を使っているかを分析する。日本人介護従事者に、以下の⑨、⑩、⑪の状況を施設利用者はどのように表現するのか尋ねた。

- ⑨しおからくて食べられない
- ⑩食事をとる
- ⑪食べたくない

表3は、⑨～⑪の文から、「利用者がよく使う熊本方言」への書き換え文に現れた名詞、助詞、述部のバリエーションをまとめたものである。熊本方言に書き換えられた文の述部には、最初に提示した共通語文とは異なる動詞や表現が見られたため、右列に共通語訳を加えた。例えば、⑨「塩からくて食べられない」に対応する熊本方言は「しおっからくてたベレン」等があるが、「しおっカラカ(しおからい)」のように文を構成する要素が異なる表現が見られた。このため、⑨の書き換え文が複文かどうかによって2種類に分けている。

まず、方言的特徴として、助詞の交替、接続表現、否定の表現、終助詞タイとパイについて述べる。前節でも格助詞「を」がバなどの方言形の助詞に交替している現象について述べているが、⑩でも格助詞「を」(41件中5件)は方言形の助詞への交替が起こっており、特に方言形の助詞バ(同32件)が圧倒的で、有意に差があるという結果になっている(両側検定： $p=0.0000$  \*\* ( $p<.01$ ))。

⑨の「しおからくて」には、理由を述べる「からくて」(27件中5件)という連用形が含まれている。熊本方言で理由を述べる際によく使われる方言形の接続助詞ケンが接続した「からカケン」(27件中3件)を使った回答もあったが、この「からくて」「からカケン」より多く用いられたのが形容詞「からい」の連用形ウ音便「かろうして」が長音短呼となったカロシテ(27件中19件)で、三つの中で最も優勢であった( $\chi^2=16.891$ ,  $df=2$ ,  $p<.01$ )。他に、「しおハイカ(しおからい)」という回答があり、これは長尾(1986)によると宇土地域(旧不知火町・松橋地区)での方言調査で使用が報告されている表現である。

また、⑨「しおからくて食べられない」では、否定の助動詞「ない」が方言形のンと交替する例しか出現せず、共通語の「ない」が使用された例はなかった。同様に、⑪「食べたくない」では、否定の形容詞「ない」が含まれているが、回答に「ない」という形のまま使用された例はなく、カ語尾を用いた方言形のナカ(58件中34件)、否定の助動詞の方言形ン(同19件)、拗音化したニャー(同4件)、「食ベンチャヨカ(食べなくてもいい)」のように、否定的意味で使用された方言形ヨカ(同5件)が使用されている。否定の表現に関しては、助動詞は方言形ンへの交替、形容詞ではカ語尾ナカ使用の優勢となっている( $\chi^2=38.516$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。

表3 自分の行動について述べる表現⑨～⑪の回答

⑨塩からくて食べられない	
「利用者がよく使う熊本方言」として書かれた文	共通語訳
しおっカラカ、しおカラカ、しおかりヤ、しおハイカ、しおけノきいトル、からカ ／あじノコユカ	しおからい ／味が濃い
しおっからくて、しおかロウシテ、しおからして、しおんからくて、しおけんつよシテ からカケン、からくて、 からして、かロウシテ、カロシテ、 ／あじノコユクテ └たべれん、たべられん、たベキレン、 くわれん、くえん、くえんタイ、くえんバイ、くいキラン、くいキランバイ いけん	しおからくて  ／味が濃くて └食べられない
⑩食事をとる	
食事 めし、ごはん、まんま、	食事 ／ごはん
を、バ くう、くらう、くうバイ、くうタイ、たべるバイ、たブツバイタ、 ／くおうかネ、くおか、くおかな、くおうか、 ／くいヨル、たベトル、たベヨカ、たブル ／くった、くうたバイ、 ／くうおうゴタル、 ／くわニヤン、	を └食べる ／食べようか ／食べている ／食べた ／食べたい ／食べなければ ならない
⑪食べたくない	
ごはんバ	ごはんを
たベヨゴツナカ、たベゴツナカ、たベトーナカ、たベヨウゴツナカ、たベヨゴンナカ、 たベンチャヨカ くわんジョカ、くわんチャヨカ、くいたくナカ、くいたくニヤア、くいとウナカ、く トオーナカ、くうゴンナカ、くうゴツナカ、くおうゴツニヤ、くおゴツナカ、くおゴ ツニヤア、くおゴツナカ、くおゴンナカ、	食べたくない
ご飯ナ、めしは、めシヤア、 └くわん ／いらん／ヨカ ／いけん、いけんモン	ごはんは └食べない いらん／いい ／（食欲がない）

終助詞についてみると、例えば、⑩「食事をとる」では、終助詞に方言形のタイ（50件中4件）、バイ（同8件）が使用されていた。この2つの終助詞のうち、タイは聞き手の理解確認を要求する含意があるのに対して、バイは単に自分の主張を相手に伝える意図しかない。⑩では、①の「スプーンがない」における回答と同じように、食事の場面では方言形バイの方が使用件数が多く、タイが含意している、相手の理解を確認するという意図を含んだ使用は少なかったと考えられるが、件数について検定を行った結果、方言形タイとバイの現れ方に数値的な有意差を表す結果は現れなかった。（両側検定、 $p=0.1094$ 、ns）

本章でも前節同様、高齢者の語選択という観点から分析した名詞及び動詞について述べる。前述の⑤「食事の量が多い」では、漢語「食事」対和語「ごはん・めし」に有意差が現れなかったが、⑩では「食事」（40件中2件）と、回答例の多い和語の「ごはん」（同13件）、「めし」（同23件）とでは、明らかに有意差があらわれた（ $\chi^2=17.423$ 、 $df=2$ 、 $p<.01$ ）。前述の⑤「食事の量」のように、直後に名詞が接続される形より、⑩の「食事をとる」のように動詞の目的語として使用されている場合の方が、和語への交替が多くなると考えられる。

⑨～⑪の全ての設問に「食べる」という動詞が提示されているが、回答には「食べる」（⑨39件中11件、⑩50件中8件、⑪58件中20件）の他に「食う」（⑨同27件、⑩同39件、⑪同29件）が多く使われている（ $\chi^2=6.584$ 、 $df=2$ 、 $p<.05$ ）。高齢の施設利用者にとって「食べる」よりも「食う」の方が日常的な表現であることが推察できる。

#### IV. 結論

介護現場の食事場面で用いられる11の文を共通語で提示し、施設利用者である高齢者は熊本方言でどのように表現するかについて、40名の介護従事者から回答（512文）を得た。これらの回答について調査分析を行った結果、熊本方言における特徴としては、形容詞、助詞、助動詞、音韻について、次のような傾向が明らかとなった。まず、形容詞はこれまでの先行研究に変わらず、カ語尾の優勢な状況が証左される結果となった。また、助詞では、格助詞「が」は「ノ、ン（ノの音便形）」に交替し、格助詞「を」は「バ」への交替が優勢となっている。加えて、形容詞「ない」のカ語尾ナカへの交替、否定の助動詞「ない」のンへの交替が有意に多い結果となった。音韻的特徴としては、日常語として使用頻度が高いと思われる「みそ汁」について、みそシュル、みそシュリ、さらには声門閉鎖音を伴ったみそシュッなど、熊本方言特有の音変化に基づくバリエーションが観察され、共通語形と方言形の使用には一定の有意差が認められた。

また、熊本方言ではないが、高齢者の語選択には、「スプーン／さじ」「エプロン／前かけ」等の外来語と和語の対立があるほか、「食べる／食う」「(食器を) さげる／ひく／片づける」「お手ふき／手ぬぐい」等、様々な類義語の出現が確認された。これは、同一事象を表す場合、共通語であっても語彙や文法の形式が多岐にわたることを示唆している。

#### 終わりに

本稿では、介護現場の食事場面における熊本方言の使用状況の一端を明らかにしてきた。上野(2012)や今村(2014)が介護現場での困難点として「方言」をあげていたが、その指摘を裏付けるような結果となった。高齢の施設利用者が使用する熊本方言を含む文については、共通語文で生成されるバリエーションよりもさらに複雑な様相を呈している。これは、日常の業務を通じた自然習得だけでは到底間に合わず、施設利用者と技能実習生を中心とした外国人介護従事者の間の言葉の壁は一向に取り去ることができないことになる。

方言を使用した発話の理解を促進させるには、共通して高頻度に出現するルールについて習得し、徐々に出現の頻度が下がるものを導入する方法が現実的であると考えられる。具体的には、まず、名詞や動詞、形容詞等の内容語は、文の中でキーワード的な役割を果たすため、文全体の意味の理解に影響を及ぼすことが考えられる。そのため、本稿で明らかになった名詞の和語と外来語、形容詞のカ語尾等、高頻度に交替が起こるこれらの品詞や音声的特徴について、最初に提示する必要がある。次に、格助詞や助動詞など機能語については、文の構造の理解に影響を及ぼすため、文のより正確な理解を支えるものとなっている。そのため、内容語とともに、例えば、格助詞ノやバ、否定の助動詞ン等、機能語についても意味や使い方についての理解が進むような教材が求められる。

方言多用地域で看護・介護に従事する外国人のための方言学習教材は、今後ますます必要なツールとなると考えられる。本稿で得られた結果をもとに、熊本方言の音声や文法表現の特徴、出現頻度の分析をより詳細に行い、介護・看護従事者が業務に従事しながら、効率的に方言を学習する教材の開発を進めていきたい。

\*本研究は JSPS 科研費 JP20K00729 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- 秋山正次（1969）「九州方言の各県別解説」『九州方言の基礎的研究』 p.228
- 秋山正次（1998）「8 熊本県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言一』国書刊行会
- 秋山正次・吉岡泰夫（1991）『暮らしに生きる熊本の方言』熊本日日新聞社
- 一般財団法人海外産業人材育成協会（2010）『専門日本語入門 場面から学ぶ介護の日本語』（凡人社）
- 糸井寛一（1969）「九州方言の総括的解説」『九州方言の基礎的研究』 p.266
- 今村かほる（2014）「災害対応のための方言活用システムと方言ツールの開発」科研費成果報告書
- 上野美香（2012）「EPAによるインドネシア人介護福祉候補者の受入れ現場の現状と求められる日本語教育支援一候補者と日本語教師への支援を目指して」『国際教育研究誌』
- 奥村匡子、野村愛、石井清志（2021）『介護の専門日本語一介護福祉士国家試験合格をめざす人のために』（凡人社）
- 神部宏泰（1992）『研究叢書108 九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 九州方言学会編（1991）『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 厚生労働省資料「外国人介護職員の雇用に関する介護事業者向けガイドブック」<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000496822.pdf> 2021年11月29日確認
- 長尾勇（1986）「しははゆし考」『語文』（通号66）日本大学国文学会編 .12 p.68～78
- 原田芳起（1954）「九州方言に現れた弱母音化規則」（『日本列島方言叢書② 九州方言考① 九州一般』ゆまに書房再録）
- 松田正義（1969）「九州方言概論」『言語生活』（『日本列島方言叢書② 九州方言考① 九州一般』ゆまに書房再録）
- 三橋麻子、丸山真貴子、堀内貴子（2017）『はじめて学ぶ介護の日本語 基本のことば』（スリーエーネット ワーク）

Diversity of Expression in Regions Characterized by the frequent use of Dialects:  
Dialects Used by Nursing Home Residents in the Context of Meals

WADA Reiko • YOSHISATO Sachiko

Keywords: Kumamoto dialects, foreigners engaged in nursing and caregiving  
“*ka*”-*gobi*, postpositional particle, phonological changes

This study aims to develop an app of teaching materials to facilitate the learning of dialects. The app is designed to help foreigners engaged in nursing and caregiving, “hear and understand” dialects used in the Kumamoto City region. Prior to the preparation of the teaching materials, a questionnaire survey pertaining to the Kumamoto dialect commonly used by nursing home residents was circulated among the 40 Japanese nursing home employees participating in this study. This paper analyzes and draws inferences about the Kumamoto dialect based on the data collected through the survey.

The survey first extracted sentences typically uttered by nursing home residents in the contexts of “meals,” “complaints with regard to pain/symptoms,” and “daily life.” These sentences were based on *Senmon Nihongo Nyumon: Bamen kara Manabu Kaigo no Nihongo* (Introduction to Specialist Japanese: Learning Nursing Care Japanese in Context), a Japanese language textbook for foreigners involved in nursing and caregiving. The Japanese employees were asked to convert these sentences into the Kumamoto dialect, which is common among nursing home residents.” For instance, they were expected to describe “After a meal as *mo kuiowatta-bai*. (I have finished eating).” In this way, 512 Kumamoto dialect sentences used in response to standard sentences (11 sentences) in meal contexts were analyzed in this study. The sentences thus obtained were classified as “expressions that explain situations: noun + *ga* + change of state verb/adjective,” “expressions that encourage others’ actions,” and “expressions that explain someone’s own actions.” A statistical analysis was conducted on the data obtained, and the following characteristics became clear.

It was found that all the adjectives belong to the “*ka*”-*gobi* dialect form (in the Kumamoto dialect, the predicative/attributive conjugative suffix of the adjective becomes “*ka*”), such as the dialect forms “*naka* (not),” “*kataka* (hard [in texture]),” *koyuka* (thick),” and “*ooka* (a lot).” With regard to postpositional particles, the nominative postpositional particle “*ga*” changes to “*no*” or “*N*” in many cases. Finally, in many instances, the accusative “*wo*” changes to “*ba*.”

While postpositional particles and adjectives typically correspond with standard Japanese, phrases in regional dialects vary significantly. For example, there are nine variations of expressions that correspond to the noun “*miso-shiru*” (miso soup); some of these include “*miso-syuru*” and “*miso-otsuyu*.” Furthermore, the expression translating to “*The miso-shiru* is getting cold” is expressed in different ways, using the dialect verbs “*hiyuru* (getting cold)” or “*samuru* (getting cold)” as well as the adjective “cold.” Finally, several variations in the use of the predicate exist, including “*hie-toru* (It’s cold),” “*hiete-shimo-toru* (it’s gotten cold),” “*sameto-rasu* (It’s cold),” and “*us-samechi-shimo-toru* (it’s gotten cool)” .

Presumably, in real-life communication scenarios, standard language may also employ several

combinations of vocabulary and grammatical forms to express the same phenomenon. However, this survey confirmed that in regions that frequently use dialects in their social activities, even more diverse expressions may appear through aspects unique to the dialect, including phonological changes and grammatical forms.

The dialect-learning materials for foreigners engaged in nursing and caregiving in regions that frequently use dialects in social activities need to cover how postpositional particles and adjectives in regional dialect forms correspond to standard Japanese, as well as commonly used dialect forms. Through a detailed analysis of the characteristics possessed by the phonological and grammatical expressions observed in this survey and a consideration of their frequency, the development of teaching materials may be planned.